

そんな境遇の中でも、幸いに子供たちは順調に育つて、立派に暮らしています。私の二人の兄も戦死しました。子供が生まれることも知らずに、レイテ湾で死んだ兄の子供も、もう五十七歳。まだまだ戦争は終わっていない様な気がします。子供を亡くし、夫を亡くし、父を亡くした人々のことを思うと、何ともいえない気持ちになります。

でも、だれが、何が悪かったのか定かではないが、そんな中で一心同体で生き抜いた青春時代を、今になれば懐かしく思うこともあります。良い一生を終えるためにも、二度と再び、戦争のような悲惨な殺し合いは真つ平です。

今年も五十六回目の終戦記念日を迎えようとしています。様々なことが思い出されて感無量です。

北京からの引揚げ体験記

東京都 川合 継美

トルストイの畢生ひせいの大作である「戦争と平和」という小説は、いつも私の頭の中に刻みこまれていて、消えることがありません。それは、戦争を体験した者であるなら誰しもが、この相反する二つの言葉の中で生きてきたからであると思います。あの太平洋戦争がもたらした、さまざま悲劇。年月を経るごとに、ともすれば遠く忘却のあなたに流されてしまいそうな昨今ですが、今のこの平和は、こうした戦争の尊い犠牲の生命の上に築かれたものであることを、私たちは一瞬たりとも忘れてはならないことと思います。

私は、そう自分に言いかけながらも、ここに自分の引揚げの体験を書くことに、非常にしゅん巡しました。その理由は、引揚者としての私は、比較的恵まれた状況下であり、満州奥地からの方たちのように、

もっと筆舌に尽くせぬ苦難を乗り越えて日本に帰って来られた方々がたくさんいらっしやることを思ったからであります。しかし、戦争を知らない人たちに、五十数年前の、あの忌まわしい戦争の実態を語り継ぎ、戦争というものの悲惨さをしつかりと認識してもらおう努力を積み重ねていくことは、こうして二十一世紀に生かされている者たちが、なさなくてはならない使命であることを思い、私は、その使命の一端なりとも果たすことができるならばと、自分の引揚げ当時の経験を記させていただくことに心を決めた次第です。

私が生まれたのは横浜ですが、父の仕事の関係上、一年半ぐらいの赤ん坊のころに大陸に渡り、以後、小学校五年生まで北京で過ごしました。

昭和十六（一九四一）年四月、それまでの小学校が国民学校と呼ばれるようになり、その年に私は一年生になりました。そして、同年の十二月八日に太平洋戦争に突入したのですが、私が戦争という血生臭いにおいを最初に子供ながらに感じたのは、国民学校に入學した当初よりもむしろ、幼稚園児だったころにさかの

ぼります。

中国（当時は支那と言っていました）、その中国では昭和十二年七月に盧溝橋事件、通州事件があり、その他にも歴史上では、抹殺されてしまったような数知れぬ事件があったと聞かされています。そのような不穏な情勢の中で、同じ昭和十二年七月二十七日に、ついに日本と中国の間で戦争の火蓋が切って落とされたのでした。私の知っている方たちにも、昭和十二年に、既に、夫が、父親が、戦死の報を受けたという方が幾人かいらっしやいます。私が幼稚園に通っていたころのことです。私たち幼稚園児は、一週間前に一度ぐらいバスやトラックに乗せられて、あちらこちらの病院に、傷病兵の慰問に行きました。幼稚園の先生はもちろんですが、いつも母も一緒に付き添って来ていました。北京の陸軍病院には、とても大きくて立派なホールがあり、広いステージで一生懸命に歌ったり踊ったりしたものです。

また、北京陸軍病院とは対照的に、小さな質素な病院もあり、急ごしらえの舞台が造られていて、ステー

ジから落っこちそうになったこともありました。どこかの病院にもたくさんな、白衣の兵隊さんたちがいて、真っ黒に日焼けした顔に白い歯をみせて、にこにこ笑いながら私たち園児を見ていらしたことが、懐かしく思い出されます。でも、私たちのお遊戯を会場まで見に出て来られる方々は、軽症の兵隊さんたちでした。重症の方はベッドの上で動きがとれません。私たちは看護婦さんに案内されて病室まで行ったこともあります。そういうときには、短い簡単な歌や、踊りを披露しました。包帯を足や手にぐるぐる巻いた兵隊さんや、そのほかに、いろいろな姿の兵隊さんが、微笑みながら、じっと目を細めて私たちを見ていられたのが印象に残っています。

ときには、すっかり傷も癒えて元気になられた兵隊さんが、我が家に訪ねて来られたこともありました。そのときにはもう戦闘帽をまぶかにかぶり、カーキ色の兵隊服に身を包み、足にはゲートルを巻いて雑々しい姿に変身なさっていました。慰問に行ったときの白衣の兵士の面影は、もうどこにもありませんでした。

しかし、この方たちは弾の下をくぐるために、再び戦線に戻って行かなくてはならなかったのです。あれからどうなさったのか。無事に祖国日本に帰ることができたのでしょうか。

慰問のことは、子供のころのことなので、自分の意思からではありませんでしたが、私は六、七歳のころに慰問という形で、たくさんの兵士の方たちにお会い致しました。そのことによって、多少なりとも兵隊さんたちの心を和ませ、お慰めできたのであれば、私にとってこんなに嬉しいことはありません。私たち園児を指導し連れて行ってくださった、今は亡き幼稚園の先生にも、感謝の気持ちでいっぱいです。

私の父は、満鉄の調査部に席をおいていましたが、本来は大陸農業経済の研究者でした。父は、私を日本の小学校に入れたかったらしいのですが、自分のおかれている立場上、すぐに北京を離れることができなかったのです、とりあえず私だけを、信頼できる人と一緒にさきに日本に帰し、あとから母と共に祖国に戻りつもりでいました。しかし、戦争の色が濃くなってき

た状況から、父は戦争中には、親子が別々にいるよりは一緒にいた方が良いと判断し、昭和十六年四月、私は北京の第一国民学校に入学いたしました。

慰問に行かなくなった私は、三年生になるころまでは、幼稚園の時代よりも戦争の厳しさを感じることもなく、楽しい学校生活を送っていました。当時は、国民学校三年生になると、第二国民学校といわれていた朝鮮人学校と、日本人学校が一緒になることになっており、私のいた級にも朝鮮の子供たちが入ってまいりました。子供同士のことで、すぐに打ち解けて仲良くなりました。そのうえ朝鮮人の生徒は、皆とても頭が良くて成績優秀であったのには、正に脱帽でした。

やがて四年生になると、今は戦争の世の中であるという実感が、比較的のん気だった北京の学校にも感じられるようになりました。このころから、私の特殊な体験も始まるのです。私の体験とはいっても、それはほとんどが、終始戦争に反対であった、父の妥協のない生き方に左右されています。父は、前にも記したように、中国農業経済の研究調査という自分の専門分野

の立場から、この戦争は無謀な戦争であることを主張し続けていました。また、その方面の著書もたくさん出版されております。

自分が日本人であるということと、中国を心から愛していた父は、両国の狭間で、とても悩んでいたようです。その点では、父はハムレット的だったと私は思っています。そんな父でしたので、父が日本にいたら、もっと早くに憲兵隊に捕らわれていたのではないかと思います。一面、北京は弾圧という点では、多少遅れていたというか、ワンクッションあったのではないのでしょうか。

しかし、父の動向に常に目を光らせていた北京の憲兵隊は、遂に父の逮捕に踏み切りました。忘れもしません、昭和十九年十二月六日、私が国民学校四年生の時のことです。氷の張った寒い冬の夜明けの五時に、突然どやどやと多勢の憲兵が家の中になだれこんできて、父をはじめ父の部下三十六人を一斉に検挙して連れ去りました。同時に、家宅搜索も行われ、父の書斎の本を足の踏み場もないほどに散らかして、荒らして

出て行きました。教養のない憲兵たちは、横文字であれば文学書であろうと詩集であろうと、全く区別がつかずに、シェークスピアもトルストイも全て戦争に反対する内容であるとして、没収して持ち去りました。

今から思うとナンセンスとしか言いようがありません。今のようになんかマスコミの発達した時代ではありませんでしたので、父の憲兵隊による逮捕は一般にはあまり知られてはいませんでした、それでも学校の先生たちはご存知だったようです。でも先生方は、決して私を特別視することなく、それまでと少しも変わらぬ態度で接してくださいました。

憲兵隊は大事件にしようと、ものものしく父以下三十六人を検挙したので、何が何でもうち上げたいと必死になっていました。事件にしようとした内容は、次の三つにしばられます。

- 一、梨本（父）が華北交通を根拠として、左翼的思想の社員を糾合し、華北共産党を組織しようとして

二、食糧集荷を名目として、重慶、延安に内通して

通敵行為を行っているという嫌疑

- 三、梨本という苗字が、梨本宮と同じなので「宮さま」と呼ばれていた不敬罪の嫌疑

というものでした。憲兵隊は、東京にまで調査の手を伸ばしましたが、遂に何の手掛かりをつかむこともできず、昭和二十年八月十五日を迎えることになったのです。日本は、無条件降伏をして敗戦国となったのです。

夏休みでしたが、私も学校に呼び出されて、太陽の日ざしの強い校庭に立って、天皇陛下の玉音放送を聞きました。日本が負けたと知って、先生はじめ皆は大変動揺していましたが、私はこれで父が釈放されて帰って来るのではないかと、むしろ希望が湧いてきて、ほっとした気持ちになっていました。私は一人っ子だったせい、人がフィーバーしている時に、いつもどこかで冷めているような性格の持主のようでした。あまり良いことだとは思いませんが。

しかし、敗戦の口を過ぎて、父はすぐには帰って来ませんでした。留置場から領事館に移されて一カ月

後の九月十五日に釈放されたのです。十月月ぶりに我が家に帰って来た父は、さすがにやせ細って、顔にも深いしわが刻まれていました。相当に身体が弱っていたように思います。昼間でも時間があると、応接間のソファに横になって、すぐにうつらうつらと眠っていました。

それにしても満州にいた方たち、特に開拓団の方たちのご苦難を思うと、北京はどんなに恵まれていたことか、今改めて感慨を深くするばかりです。恐怖感が全くなかったわけではありませんが、とにかく、しばらくは家の中で普通に暮らすことができたのですから。

そんな北京でしたが、やがて日本人の戦争犯罪人と中国人の漢奸（カウカシ）といわれる人たちの逮捕が始まりました。父はかつて、有名な政治家の汪兆銘や、王克敏らと親交を深くしていましたが、こうした方たちが既に病死してこの世にいなかったことが、せめてもの救いだったと思っていました。生きていたら、当然、捕えられて処刑されていたに相違ありません。そ

の他にも、親日派だった何人かの中国の方たちが、漢奸という汚名のもとに、二つの国の狭間のもたらす悲劇の中で、処刑台の露と消えてゆきました。しかし、こうした方々皆が、決して祖国を売ろうとしたわけではありません。どこまでも日本と中国の和平を願って、懸命に努力をした方もたくさんいたのです。私は、今もその方たちのお顔が臉に焼きついていて、離れることがありません。戦争のもたらす悲劇は、人には知られざる形のがさまざまにあるのだということ、痛切に感じるばかりです。

そうしながら、昭和二十年も終わり、表面は静けさを保ちながら、ささやかに正月を迎えることができました。その当時、日本人は「日僑」と呼ばれていました。日本人の引揚げを推進するために「日僑自治会」が組織され、父はその会長に推されました。生まれつき体力に恵まれていた父は、年を越したころからすっかり元氣になり、会長を引き受けてからは、引揚げ事務に追われる忙しい日々を送るようになりました。引揚げの交渉は大変困難を極めたようです。北京在住の

日本人だけでなく、蒙疆^{モウキョウ}地区、その他の奥地から体ひとつで北京にたどり着いた日本人も少なくなかったからです。日本人戦犯の逮捕、処刑が日増しに激しく行われるようになっていく中で、我が身の保全と利を求めようとして、人を裏切り、陥れようとする日本人も横行していました。

母は父の身をととも心配していました。戦時中、父を捕えて留置し、事件にしようとしたもの憲兵たちが、今度は父に報復されるのを怖れて、何をしてくるか分からない状況もあったからです。母は、日僑自治会の会長は、他の方に代わってもらった方が良いのではないか、できるだけ目立たぬように身をひそめていた方が安全ではないか、とたびたび父に言っていました。父は母の心配する気持ちを察していたとは思いますが、日僑自治会の会長の責務から離れようとはしませんでした。父は、母に言いました。「今、誰が中国側と引揚げの交渉ができるというのだ。まだまだ帰国の手続きができなくて、困っている人がたくさんいるんだよ。僕は、その人たちを見捨てることはできない

いよ」

私の家では、旧満鉄で父の部下だった人たちが家族ぐるみで一緒に暮らしていましたので、大世帯でした。父は、愛蔵の書画骨董を売り払いながら、全員の生活を支えていましたが、そんなことをしていられないのも、満州奥地の方たちのことと比べれば、北京はまだまだ余裕があったといえましょう。

昭和二十一年二月六日、厳寒の北京は、その日も冷たい細雪が舞い散っていました。私たちが夕食の食卓につこうとしているとき、「梨本、梨本はいるか」という声が出て、中国憲兵隊の隊員たちがドアを蹴とばして、家の中になだれこんできました。色白で細面の美男の隊長が、流暢な日本語でしゃべりはじめました。「梨本祐平を、これより中国憲兵隊は中国侵害罪により逮捕する」そして、戦時中、日本の憲兵隊に逮捕されたときと同じように、また家宅捜索が行われました。このころには、もう本もなく、家財道具も必要なものしかありませんでした。それでも、憲兵どもはがさがさと家の中を探しまわり、家宅捜索の終わるこ

ろには何となく楽しそうな顔をして、残っていた品物を持ち去りました。背中にピストルを突きつけられ、手錠をはめられた父は、外見は悠々と見えましたが、心中はどんな思いだったか。やがて、父を乗せた大きな黒い車は、どことも知れず走り去って行きました。

それから二カ月ばかり、父はどこへ連れて行かれたのか、その行方はさっぱり分かりませんでした。中国の友人や日本の方たちが、八方手を尽くして探して下さいましたが、何の手掛かりもつかむことができませんでした。父は、もう殺されてしまったのかもしれない。そんな思いに日夜心配し苦しみながら、母と私は胸が押し潰されるような毎日を送っていました。我が家にいた旧満鉄の方たちも、父の安否を気遣いながら、少しずつ日本に帰っていききました。残されるということは、非常に寂しいことでもありましたが、一人でも早く日本に無事に帰ってくれることは、母にとっては、ほっとした、肩の荷を下ろしたような安堵感もあつたようです。

四月の初めごろだったでしょうか。ようやく父が拘

留されている場所が分かりました。それは映画「ラスト・エンペラー」で世に広く知られている、かつての満州国皇帝であつた溥儀氏の従妹であり、男装の麗人として有名を馳せた川島芳子の邸宅でした。そのとき、既に川島芳子は「東洋のマタハリ」として捕えられ、死刑を待つ身となっていました。彼女が、日本人戦犯刑務所と化していたということは、まさに皮肉なめぐり合わせと言えるような気がします。

後に、父が日本に帰って来てから聞いたのですが、当時、北京には秘密監獄というものがあつた。父は二カ月間、その監獄に留置されていたのだそうです。この秘密監獄に入れられた人は、まず生きて出ることは難しく、父は奇跡的にもここから移されたのでした。父の拘留されている所が分かると、母はすぐに差し入れの品を用意して、父に面会に行きました。はじめのうちは、母は私を連れて行こうとはしませんでした。感じやすい年ごろの子供に、中国の刑務所にいる父の姿を見せたくなかつたのでしょう。気性の強い父は、母

が心配したほどには弱っていなかったようです。

「思ったより元氣そうだったわ!」と、帰宅した母はそう言って私を力づけてくれました。それから、母は何度か差し入れを持って面会に行きました。

六月に入ると、母は遂に獄中にいる父を残して、日本に帰る決意をしました。生活していくのにお金も食糧も底をついていましたし、最後の日本人の引揚船に乗った方が良いと判断したからです。母は、成長過程の私の行く末も考えたのだと思います。

当時、中国共産党地区に逃げた日本人も相当いましたが、国民政府側に捕らわれている父を持つ身の私たちには、それは到底できることではありませんでした。父の死刑を確定し、早めてしまうことになりました。

日本の六月は、うっとうしい梅雨の日が続きますが、北京は初夏のさわやかな候です。そんなある日、私も母と共に父に面会に行きました。前にも述べた川島芳子の豪邸は、石だたみの庭の両横に鉄格子の牢獄が造られていて、その中に灰色の囚人服を着せられた

日本人がうごめいていました。足かせをはめられている人は、死刑囚だと聞かされました。私たちの姿を見ると、何人かの囚人が牢の格子につかまって、悲痛な声で叫びはじめました。「あなた方は無事に日本に帰れていいですね。僕らはもうすぐ殺されるのですよ!」母はていねいに頭を下げながら歩いていきました。私はただ唇を噛みしめて、うつむいて通り過ぎました。

この日の父との面会は、中国側の特別な計らいで、瀟洒な応接間で行われました。螺旋階段をのぼって部屋に入ってきた父は、こざっぱりとした白い開襟シャツを着て、相変わらずにこにことして元氣そうに見えました。足に鎖はありませんでしたが、おそらくこれが父との今生の別れになるのだらうと、私の胸は重くふさがれてゆくのでした。三十分の面会時間はたたく間に過ぎて、面会は終わりました。「継美、ママに親孝行をするんだよ!」父はそう言い残して、私たちの視界から消えていきました。

その日から一週間ほどして、母と私はわずかに我が

家に残っていた人たちと一緒に懐かしい家をあとにして、北京の集結所に入りました。

いよいよ、北京駅に向かって出発する日の朝、トラックに乗せられた私は、ハッと目を見張りました。

我が家にいた中国の人たちが、家族全員で小さな子供たちまで見送りにきてくれたのです。「再見、再見」と言いながら母と私はトラックの上から手を出して、その人たちと固い握手を交わしました。やがてトラックが走り出すと、皆は泣き叫びながら手を上げて、どこまでもどこまでも追いかけてきます。母も私も溢れる涙を拭き払うこともせず、手を振り続けて別れを惜しみました。

北京駅から貨物列車に乗せられて塘沽に着き、船の出るまで収容所で寝起きしました。あとで聞いたところによると、有蓋車に乗せられたのは、私たちが初めてだったとのことでした。それまでは屋根のない無蓋車で、石を投げこまれたりしたのだそうです。

収容所に入ってから残されている恐怖は、戦犯者と同姓の人たちが呼び出されて、連れて行かれることで

したが、収容所の中では日本人同士助け合って仲良く過ごしていました。

一週間ほどして、いよいよ船に乗ることになりました。私はこみ上げる惜別の思いを抱いてLST（上陸用舟艇）の甲板に立ち、ふと彼方の堤防に目を向けた時、そこに黒い衣服に身を包んだ我が家にいた中国人の孫さんが、直立不動の姿勢でじっとこちらを見つめているのに気付きました。孫さんは私たちのあとを追って、こんな所まで見送りにきてくれたのです。中国の方の友情が、どんなに熱く深いものであるか、このときに改めて痛感しました。

玄界灘はさぞかし荒れるだろうと覚悟していたのですが、海はまことに静かで、引揚者をいたわるかのように、無事に佐世保に運んでくれました。

母と私は遠縁を頼って、岡山に行きました。岡山の瀬戸町という小さな町に、私たちより一足さきに、母方の祖父母が、満州の本溪湖から引き揚げてきて、母と私を待っていました。この町で私たちは、皆で父が生きて帰って来ることを祈りながら、力を合わせて

日々の営みに精を出していました。

母は、親類の家の店さきの一隅を借りて、小さな小間物店を開きました。これは結構繁盛したようです。

一方父の方は、やはり死刑の宣告を受けました。その点については、母と私が日本に引き揚げて以後のことなので、父が奇跡的に生還してから、その顛末を聞きました。

昭和三十三年に、父は平凡社社長の故下中弥三郎氏の要望を受けて、『中国のなかの日本人』と題して、中国における自分の体験を記した本を出版しております。この本は一個人体験というだけでなく、歴史を証明する資料的な著書でもありました。私はその著書の中から、当時のことを紹介してみたいと思います。なぜなら、父が死刑を宣告されたから一転、無罪釈放となつて帰国できたのは、中国の多くの友だちの友情の賜であつたからです。私は、その友情を決して忘れてはならないと思っています。こうした友情こそ、日本と中国の友好の礎ともいえるものではないでしょうか。

父が死刑を宣告されてから一カ月ほどして、父は検察官に呼び出されました。いよいよ死刑執行だと心にいきかせながら、検察総長の前に立った父の耳に聞こえてきた言葉は、思いもかけない無罪釈放の言い渡でした。「梨本祐平の死刑を免除し、無罪釈放する。被告の犯した中国侵害の罪は許し難いが、被告は戦時中、中国農民をよく愛撫し、中国人民のために尽くしたる功績により、中国刑法は寛大なる特例を以つて、梨本祐平を無罪とするものである。右宣告する」我が耳を疑いながら呆然としている父に、検察総長は口辺に微笑みを浮べて「梨本、お前には良い友達があつて辛いだつた。皆がお前の助命嘆願を出したので、孫連中閣下が寛大なご措置をとつてくださつて、お前は助かつたのだ。その人たちは昨夜からここに集まつて、お前の釈放を待っている。早く会つて、よく礼を言う」と、促しました。隣室では、二十人以上の友人が、父の釈放を今か今かと待っていたそうです。

そのいきさつは、梨本祐平の死刑の判決を新聞で知つた友人たちが、我々が助けてもらった梨本先生を

我々の手で救い出すのは当たり前だと言って、こぞって助命嘆願運動に立ちあがってくれたということでした。その人たちは、どんなに檢察総長に断られても、くじけることなく、根気良く運動を続け、遂に檢察側もその熱意にほだされて、嘆願書を受理するに至ったのでした。ひとりひとりからその経緯を聞かされた父は、涙が滂^{ぽう}化として流れて止まらなかったと述べています。私は人間の生涯を通じて、これほどの感動を味わうことができたということは、誠に稀なことであり、この上ない幸せであると思います。

こうして、父は遂に、祖国日本に帰って来ることができました。「父帰る」の電報は、昭和二十三年一月四日に届きました。祖父母を含めて、母も私も父の身を案じ、寂しく迎えた正月だったので、この一片の電報で、まるで真暗な洞窟の中から、太陽がさんざんと照る外界に出たように、急に活気づきました。

私は翌日、岡山駅に父を迎えに行きました。これで今生の別れと自分に言いかけながら、北京の刑務所に面会に行った日のことが、まるで幻のように感じら

れました。もともと健康には自信のあった父でしたが、やはり大陸で重ねた長年の苦勞のせいか、帰国して胃潰瘍を患い、しばらく静養しなくてはなりませんでした。

都会とは異なり、岡山県赤磐郡瀬戸町は、敗戦後とはいっても、比較的食糧には恵まれており、その上に果物が豊富で美味しいことにはびっくりしました。遠縁の方々、近所の人たちも温かな思いやりで私たち一族を支えてくださいました。

健康は徐々にとり戻していきましたが、父は東京に出て暮らすことより、そのまま岡山で次の人生を築くことに決心しました。父が考えたのは、日本で最初の労働金庫を設立することでした。労働金庫については、英国が最も進んでいると聞いていましたが、終戦直後のことで、現代のようにすぐにロンドンに飛んで行ける時代ではありません。資料不足、生活も楽ではなく、その上に満州から引き揚げてきた親族も一緒に暮らしていましたので、大家族でした。

今思い出しますと、日本の敗戦から引き揚げてくる

までの苦勞もさることながら、この労働金庫設立のための困難は大変なものでした。父は研究に研究を重ねて、何度も何度も書類を作成し、戦後の満員の列車にぶら下がって、岡山から東京まで何回往復したことでしょう。その回数はいくつになると思います。しかし、大蔵省を通過させるのは大変に困難なことでした。わずかに残っていた母の着物も、岡山と東京の交通費を捻出するために消えてゆきました。前にも述べましたが、母が営んでいた小さな小間物店の収入も、そのために充てられました。

昭和二十五年ごろだったと思います。ようやく大蔵省の認可がおりて、日本で初めての労働金庫が岡山に設立されました。それから、父は広島、姫路など、地方に出向いて、労働金庫設立の指導に当たっていました。父の身体は過勞のために日毎に弱ってゆき、そのうちに激しい偏頭痛に悩まされるようになりました。どんなに大病院で検査をしても原因が分からず、いろんな薬も一時的に痛みを抑えるだけで、本格的な効果を發揮してはくれませんでした。

そんな状況の中にも、私は東京の大学に進学し、一生懸命アルバイトをしながら東京で暮らしておりましたので、父は、仕事の第一線をしりぞいて母と共に上京してまいりました。そして、自分の本来の執筆活動に入りました。『中国のなかの日本人』については前に記しましたが、その他に、伝記『周恩来』をはじめ幾冊かの本を出版しました。どの本も、資料を探し草稿を練りに練って書き上げたものばかりです。激しい偏頭痛に堪えながら、その痛みがおさまっている合間を縫ってはペンを走らせる、私はそういう父の背中を見つめながら、明治の男の強さに舌を巻く思いでした。『中国のなかの日本人』は、外国からも次々と注文がきました。昭和四十七年、長年の悲願であった日本と中国の国交が回復されました。父はその報道を聞きながら、七十二年の波乱に富んだ生涯を閉じたのでした。

母も、父の死後二年半ほどして、眠るようにあの世へと旅立っていきました。慎ましく静かな母、身体の弱かった母が、父のような強く激しい男性に連れ添っ

て、あの激動の時代を生き抜いたので。どんなに心労を重ねたことでしょう。私は母を思うと、父のこと以上に哀惜の念に胸の塞がる思いがします。

私自身につきましては、一人娘であったがために、日本の敗戦による苦難を全て両親と共に、あるいは両親を支え背負って人生の半分以上を生きてきたと言えるところだと思います。私の最初の結婚は私が体の弱い両親を抱えたことが原因で破綻をきたしました。もちろん私が卒らなかつた面も多々あります。私は一人息子を引き取り、ずっと勤めていた雑誌社を退職して、子供の養育と両親の介護にあたりました。生計をたてるために、思い切って借金をして印刷会社を設立し、経営に踏み切りました。未知の世界に入った私は、最初の一年ぐらいいは、それは辛い思いを繰り返しましたが、徐々に会社経営も軌道に乗り、家族を養っていくことができるようになりました。

やがて両親が相次いで他界し、その後、良縁を得て再婚しました。息子も祝福してくれました。再婚してちょうど五年目に、病気がちだった息子は、義理の父

親に私を託すようにして、三十一歳の若い生命を閉じてしまいました。私は悲しみのどん底にいて、孫の代まで戦争の後遺症がしのび寄ってくるような、そんな気持ちでした。

しかし、これまでを振り返ってみて、苦しいことの連続でしたが、私は両親を見離すことなく、父母と共に苦境を乗り越えてきたことに悔いはありません。家族の確執に悩む人たちの多い現代をみて、私は両親に息子に、心からの感謝を捧げたいと思っています。

私も今年六十七歳になりました。夫とともに充実した日々を送れるこの幸せは、前文にも記しましたように、たくさんの方々の戦争の犠牲となられた尊い生命の上に築かれています。その上に、息子の死も乗り越えた今、つくづくと思うことは、これから先も息子の分まで、中身の濃い、掘り下げの深い生き方を心掛けることはということ。大変抽象的な言い方ですが、そう自分に言いかけつつ、この稿を終わりたいと思います。